

1943 年 9 月から 1945 年 4 月 25 日を ひとりの少年がどう生きたか ——北イタリア「解放」のある記憶と「歴史」への参加——

村 松 真 理 子

『オリオと仲間たち—青春と戦争について』 *Orio e gli altri. Di giovinezza e di guerra.* は、小出版社ながら山岳文学や北イタリア山間部の歴史や景観等のテーマの刊行物で知られる、北イタリアのマッジョーレ湖畔ヴェルバニア Verbania 市にあるタララ書店 Tarara' Edizioni から、2018 年に刊行された。一個人、一家庭が参加し経験した、北イタリアの「レジスタンス」Resistenza の記憶について語る 100 ページ余の小さな書物である。本稿では、そこで語られる「歴史」と語ろうとする意思について紹介し、その今日的な意味について考えてみたい。

はじめに：イタリアのレジスタンスとそれをめぐる文化史について

イタリアの「レジスタンス」とはそもそも何を指すのかについて、まず簡単に確認しておきたい。

第 2 次世界大戦末期のイタリアにおけるレジスタンスと「解放」は、19 世紀末のイタリア統一からファシズムの 20 年間までの期間続いた「イタリア王国」という政体に国民が訣別し、「イタリア共和国 La Repubblica Italiana」という制度を選択するに至る決定的な契機と考えられている。その経験と歴史が、戦後ヨーロッパにおいてイタリアを北大西洋条約機構設立時からの加盟国とし、ヨーロッパ共同体の設立国の一つとした歩みの礎にある。

1943 年 9 月、連合国側とイタリア政府との「停戦協定 Armistizio」が明らかになった 8 日以降、ローマから南下したサレルノの暫定政府と、失脚したムッソリーニを首班としドイツ軍によって支えられた北イタリア、ガルダ湖畔の「サロ共和国 Repubblica di Salò」が並存し、イタリア半島は内戦状態となるが、「レジスタンス」は特に中部以北において展開した。ファシズム政権下において国内では非合法とされ、多くの活動家が国外に逃れていた反ファシズム運動を母体として、「国民解放委員会 Comitato di Liberazione Nazionale (CLN)」が結成され、サロ共和国とも呼ばれた「イタリア社会共和国 Repubblica Sociale Italiana」を支える駐留ドイツ軍と旧ファシスト勢力に抵抗する。すでにシチリアとノルマンディーに上陸を果たしていた連合国軍側と協定・合意を結びながら、共産党

系の「ガリバルディ隊 Garibaldi」、行動党系の「正義と自由 Giustizia e Libertà」などを中心に武装闘争が組織化され、勢力を拡大していく。最終的にこの内戦状態は、連合国軍を待たずに達成した 1945 年 4 月 25 日の「ミラノ解放」で終結する（現在もその日付が「解放記念日」として国民の休日となっている）。

イタリア近代史の中で、わずか 1 年半ほどの限られた短い期間であり、レジスタンスの実際の組織的軍事行動が中・北部にほぼ限られたにせよ、連合国軍の到着前に、トリノ、ミラノ等の主要都市のファシズムからの「自力解放」が成し遂げられたというその経験こそが、戦後のイタリアの礎を築いたことになる。それが、1946 年 6 月 2 日の国民投票の実施につながり、政体の選択が国民の手によってなされることを可能にし、国民の投票で選出された議員による憲法制定議会を経て「労働に基礎を置く自由な共和国」¹⁾たるイタリア共和国が生まれたとする歴史観につながる。

レジスタンスの記憶の国民的な継承は、戦後の国家の成り立ちだけでなく、半島に生きる人々の文化と言語そのものを大きく変化させる契機であり、イタリア文化史と国民言語そのものの大きな転機点だったと考えられる。ことにトスカーナ以北の半島中部・北部においてそれは顕著であり、レジスタンスの集団的経験とそこで払われた社会的・人的犠牲から、第二次世界大戦後に国際的にも高く評価された「ネオレアリズム Neorealismo」の映画や文学が生み出された。シチリア系移民の家庭出身でニューヨーク生まれの映画監督、マーティン・スコセッシ Martin Scorsese が言うように、それがイタリア文化の国際社会での名誉と地位の回復につながったという解釈は否定しえないだろう²⁾。その歴史的に特殊な条件下の体験の内に民衆的・地域的な洗礼をうけた文学言語や映像表現が初声をあげ、戦後の新しいイタリア語の表現、特に新たなイタリア語散文の文体が生まれたとする文学史、言語史にもつながる³⁾。

ただし、そのようなレジスタンスの体験の評価と戦後歴史観に対し、レジスタンスの一面的な美化であるとの批判は早くからなされたが、ことに 90 年代以降、冷戦終結後の政治的混乱と 1994 年の中道右派のベルルスコーニ政権の成立を経て、「修正主義」的見直しや脱神話化がおこなわれたのも事実である。そのようなレジスタンスの評価をめぐる見直しの議論に対して、実際のレジスタンス経験者やその同世代の人々の側からの新たな証言や反論も繰り返し試みられてきた。近年は、大部分の経験者がすでに世を去る中、可能な限りの最後の証言を残そうという動きとともに、第一次世界大戦から 100 年という節目に、イタリアの国民アイデンティティーの問題や、南北格差の起源にさかのぼるために、二つの世界大戦からレジスタンスまでの歴史観全体を見直そうとする刊行物の出版が広い読者に共有されたり、新たな映画が製作されたりもしている⁴⁾。

そのような潮流に、1945 年の北イタリア解放と戦争終結から 70 年以上の歳月を経て刊行された『オリオと仲間たち—青春と戦争について』Orio Ciferri, *Orio e gli altri. Di giovinezza e di guerra*, Verbania, Tarara' Edizioni, 2018 を位置づけることができる。このテ

クストが生まれ、何度も書き直されては刊行されるまでの経緯を間近で見聞する機会にめぐまれた本稿筆者は、この小さな書物を、北イタリアに住んでいた一家族がどのようにレジスタンスと内戦の期間を生き延びたのかを語る、興味深い一つの証言としてとりあげ、その歴史的な文脈にもふれながら、紹介したい。

1. 『オリオと仲間たち—青春と戦争』の成り立ちと構成

筆者オリオ・チフェッリ Orio Ciferri は、1928 年に中米、大アンティル諸島のドミニカ共和国でイタリア人の両親から生まれた。父親ラッファエーレ・チフェッリ Raffaele Ciferri は中部イタリアのマルケ Marche 州にある小都市フェルモ Fermo の出身で、ボローニャ大学で学位を取得した植物疫学者だった。オリオが生まれた当時は、ドミニカ共和国で農学専門学校の開設と運営⁵⁾に校長として従事していた。母親アンジェラマリア・ボルニャ Angela Maria Borgna は、北イタリアのピエモンテ Piemonte 州ランゲ Langhe 地方の小都市、アルバ Alba の出身だった。彼女は当時としては大変珍しい、大学で経営学の学位を取得した女性だったが、高校・大学時代を過ごしたトリノで知り合い婚約していたラッファエーレと結婚するため、1925 年ドミニカ共和国に渡り、当地で第 2 子であるオリオを出産した。1935 年には、ラッファエーレがフィレンツェ大学に職を得て、夫婦はオリオを連れ、イタリアに戻る。

それから 8 年後にあたる 1943 年 9 月 3 日、バドリオ政権と連合国軍との間で秘密裏に「停戦協定」が結ばれ、5 日後の 8 日に公表され、中部・北部イタリアではレジスタンスの武装闘争がはじまる。その自発的な形成期において、最初の 10 日間で約 1500 人のパルティザンが生まれ、その年の終わりには一万人、最終的に 45 年 4 月の総蜂起では 25 万人が参加した、とされている⁶⁾。43 年 9 月にオリオは高校生であり、両親と姉フィオレッタ Fiorella と、一家のイタリア帰国後に生まれた妹ドナテッラ Donatella とともに、北イタリア、ロンバルディア Lombardia 州の大学町であるパヴィア Pavia 市に住んでいた。ラッファエーレは当時パヴィア大学の植物学の教授であったが、所有していた無線ラジオを用いて北イタリアのレジスタンスの連携に協力した。1944 年 9 月、『オリオと仲間たち』本文にあるように、ミラノに駐留するドイツ軍にレジスタンスへの協力の事実が発覚し、一家は休暇を過ごしていたマッジョーレ湖畔ルイーノ Luino を急遽出発、1945 年 4 月末まで、北イタリア各地を移りながらの逃亡生活を送ることになる。当時高校生だったオリオの視点から、1943 年 9 月から 1945 年 5 月までの期間に自分と家族が体験した生活の記憶を、時系列に沿った 32 の章に分けて語るのが本書の構成である。加えて、それぞれの章の枠の中で、関連の思い出や人物についての時間的には前後するエピソードがしばしば付随的に語られ、回想される。

2. 内戦のはじまり——休暇の終わりと死の到来

まずはじめに語られるのは、1943年夏に滞在していた、ピエモンテ州の小さな町、アルバでむかえた1943年9月8日夜の短いスケッチだ。

その時点で停戦協定が署名されたことがわかった。ぼくたちが夏の休暇の一時期を過ごすことにしていた祖父母のボルニャ家の家の窓から、広場に入っていく一人の兵隊の姿が見えた。彼は立ち止まって、退却のラッパを吹く。何分かすると、足早にほかの何人かの兵隊たちが、兵舎にもどっていった。ひとりは空中回転をしてとびながら、大声をはりあげて叫んだ。「戦争がおわった、家にみんな帰るぞ」。そこで、まるで賢い預言者のように、だれかが家の中で、無駄な期待をするな、と言った。「下手をすれば、戦争の終わりはまだまだ先だ」⁷⁾

そこでオリオは友人と自転車で、南フランスから戻っていたイタリア軍の第4部隊の様子を見に行く。フランスでその部隊の兵隊たちは香水を買いあさって持ち帰ってくるために「香水部隊」と呼ばれていたが、その日の様子は混乱を極めていた。

ぼくたちはテントやトラックや地面に座り込んだ兵隊たちが、完全な混乱の内、居並ぶ中を、ぐるぐるみてまわった。そこらじゅうに武器や砲弾があった。兵隊達は、だらりとすわったまま、食べたり、タバコを吸ったり、自分達同士喋ったりしている。ぼくたちがそうだったような少年たちが部隊に入り込んでうろうろしていても、何の心配もされず関心もひかない。言ってみれば、命令が一切機能していないのだ。ドイツ軍の飛行機が低空飛行で通り、何人かの兵士は機関銃の照準に定めて追っている。もちろん、ぼくたちはむなしく期待した、撃たないかなと。明らかに、後から考えれば、彼らは撃たないようにという命令を受けていたはずだ。バドッリョ將軍の布告は、「攻撃されたときのみ反撃せよ」と言っていたのだから。つまり何の命令もなかった、も同じだった⁸⁾。

その日から少年オリオは、アルバの町の変化を目撃する。ドイツ兵がやってくる。捕虜になったイタリア兵が、兵舎の窓から市民と情報を交換する。あるいは、家族に自分がとらえられていることを伝えてほしいと兵隊たちは頼んだのかもしれない。道の反対側を歩きながら兵舎をながめていたオリオは気がつく。一人の老人が毛布をきて地面に寝ている。近くまできて、その顔色とシャツの上のりんご大の血のシミが見え、彼は突然、理解する。その老人は死んでいると。

兵舎に閉じ込められている兵隊たちから毛布を買おうとしているところを見つつか

て、その老人はドイツ兵たちに殺されたのだ、という噂が流れてきた。
それが、ぼくの人生ではじめての「殺された死体」だった⁹⁾。

3. 家庭の中での内戦

こうして、内戦という特殊な状況に入った北イタリアだったが、個々人の暮らしは続いていく。休暇が終わると、オリオの一家はパヴィアの町に戻る。戦時中であっても、新学年が秋になってはじまるからだ。7月25日にムッソリーニの失脚がファシズム大評議会で決定した時点では学校友達はみなパヴィアにいたが、それ以来、バラバラになっていた休暇中の8月、9月の間に起こった驚くべき出来事を、学校で再会した同級生たちは語りあう。

チフェッリー家は、すでに1年以上、イタリアでは受信すれば厳罰であったはずのラジオ・ロンドンを、ファシズムに不満を持つ多くのイタリア人の家庭同様聴取していて、イタリア内外の状況の変化についての情報源としていた¹⁰⁾。そんな中、7月にはムッソリーニのファシズム内閣失墜のニュースを家族はそろって喜んで受け止めたが、当時一緒に住んでいたとこのクラウディオ Claudio は別だった。クラウディオの父、エルマンノ Ermanno はエチオピアに渡り、当時消息が不明になっていて、クラウディオは父のきょうだいであるラッファエーレの家に身を寄せて、パヴィアで高等専門学校に通っていた。理想主義者だったクラウディオが、ファシズムについておじ一家と議論することはなかったが、その後、もともと住んでいたヴェネト州に戻り、イギリス軍戦車への攻撃で知られた青年部隊「ビルーエルーゴビ Bir-el-gobi」に参加するなど、内戦の期間中、サロ共和国側に残った。そして戦争が終結してから後に、あらためてラッファエーレの元で暮らすことになるのだが、その間の事情についていとも同士が詳しく話すことはなかったという。

ここで挿入される後日談によると、クラウディオは戦後数年たってから、先にヴェネズエラに渡っていた父エルマンノのもとで畜産業に従事することになり、その地で自分自身の家庭と農場をもつが、地元の何らかの対立に巻き込まれたのか、自分の家の前、家族の眼前で殺される。チフェッリー家はこの親戚の青年の「まっすぐで真面目な」性格を尊重した。おそらくクラウディオはその性格ゆえにファシズムの終焉期になって勝敗の見通しからではなく自らの信条ゆえにサロ共和国側で戦闘に参加し、その信ずるところを曲げない人柄のゆえに、中米での悲劇的な最期を迎えたのだらうと、オリオは結論づける。親戚の間で、政治信条が異なっても、情愛や尊敬や互助関係という個々の人格のつながりが分断の時代にも続いていたわけであり、そのような状況はこの一家に限ったものではなかったのだらう。この本の後半では、母方の親戚やアルバという小都市のブルジョワジーの共同体の中で、オリオの一家が逆に守られる立場となることが語られる。

ファシスト党员として最後までサロ共和国側に残った者の中で、戦前においてはエチオピア植民に参加し、事業の挫折や状況の変化でイタリアに帰国した経験をもち、戦後においては国内で移住したり、国外に移民として移ったりせざるを得なかったという事例は、エルマンノ・クラウディオの一家に限らない。エルマンノおじといこのクラウディオのエピソードは、多くのイタリアの中産階級のファシズム期から戦後にかけての移民の物語に重なっているだろう。

4. 少年たちのレジスタンス

さて、1943年10月のはじめには、16歳のオリオが通っていたパヴィアの古典高校の生徒たちの間では、9月8日以来ドイツ軍への投降やドイツでの強制労働への動員から逃れるために山に入ったイタリア国軍からの「脱隊者たち」sbandatiについて語られるようになり、イタリア社会共和国(サロ共和国)の成立以降、ドイツ軍およびファシスト勢力に「抵抗」する者がいるという話が伝わってきた。オリオと友人たちは「レジスタンス」と考え、少年なりの行動を起こそうとする。手始めに、彼らはイタリア国軍の指揮体制の崩壊でさまざまな場所に放棄されていたはずの武器をさがす。実際見つかったのは思ったよりも少なかったが、手に入れた少しばかりの手榴弾を、「訓練」という口実で、パヴィアを流れるティチーノ Ticino 川沿いの森で試してみたという。実際、はじめに見つかったのは、一丁のカービン銃、弾薬、弾倉、旧式の機関銃といった、多くが第1次世界大戦中にイタリア砲兵隊が使った武器類で、役に立たなかった。そして、弾倉部分を、コートの下ジャケットのポケットに忍ばせて持ち歩き、一秘密だと言いながら友人たちに見せてまわったりした。

数ヶ月後のこと、学校から強制的にある「ファシストの殉難者」の葬儀にクラス全員で行かされたとき、憤慨からぼくはズボンの後ろのポケットに、一ほとんど友人みんなにそれを宣言しつつ、ブレダ手榴弾を入れてもっていった。今も思い出すが、それは雨の日で、葬列について歩いていてぼくは足をすべらし、転んだ。まさに、手榴弾のちょうど上にしりもちをついて。家に帰ってから確かめてみると、円筒状から楕円形につぶれてしまっていた。手榴弾としての性能はすこぶる低かったが、すくなくとも安全装置はしっかり機能したわけだ¹¹⁾。

レジスタンス開始後、オリオはすこし年長の友人たちとよくつきあっていたが、彼らは43年の暮れ頃から姿が見えなくなる。実際に「山に入った」、すなわちパルチザンの戦闘員として町を後にしたり、友人によってはファシズム側の捕虜としてとらえられたりしたからだった。そして、しばらくして、オリオや同年代の少年たちにもその年齢にしかできない役割が与えられるようになる。

その時期、チフェッリ家にはスイスからの情報とチョコレートを届けてくれるスイスのイタリア語圏出身の学生ファウスト・サルジェンティ Fausto Sargenti や、植物疫学の研究者一家として滞在していることになっていたが、実際にはファシストによるユダヤ人の処刑がすでに行われていたフェッラーラ Ferrara から逃がれて来ていたユダヤ系のミネルビ Minerbi 一家などが出入りするようになっていたという。オリオ少年は、9月8日の混乱の中、まだ名前等は記入されていないがパヴィア市の公印がすでに押された身分証明書をいくつも手に入れた友だちがいた。そこで、このユダヤ系の一家のためにもらってくることに成功し、大いにミネルビ氏を驚かせた。ただし、ミネルビ氏に関して一番印象に残った事件は、一家をかくまっていた時期のある日、突然やってきたドイツ人将校たちの訪問だった。研究所の所長室に直接通じる扉の呼び鈴が鳴り、その扉を開けることを許されていたミネルビ氏が出て行くと、眼前に立っていたのはドイツ軍将校たちだった。

将校たちがチフェッリ教授の面会を求めたので、ミネルビはまだ自分は死んだわけではないと自分に言い聞かせながら、父の研究室に彼らを案内した。そこで、まだ何も知らなかった父も、彼らは研究所に隠れているユダヤ人を探しに来たのだ、と思った。そして何の用事かと尋ねると、二人の将校のうちの一人が、自分は植物学の学生で、パヴィアの植物学研究所には、イタリアで育てられている試験的に植えられた茶の木があると読んだように記憶している、と答えた。それは実際、父の前任者ジーノ・ポッラーチ Gino Pollaci により行われた試験栽培だった。もしその情報が正しければ、そしてもしまだあるなら、見せていただけないか、と彼らは望んだ。茶の木は実際にまだ栽培されていた。そこで父は彼らに見せてやっただけでなく、気前よく、そのうちの小さな一本の木を贈った。彼らは大いに感謝し、帰っていった¹²⁾。

当時の思い出を記したこの小さな本を現在読む読者の視点から、おそらくもっとも印象的なのは少年たちがどのように危険を冒しながら、レジスタンスに参加し、彼らにしかなかなかできなかったはずの貢献をしたかを示す、次のエピソードだろう。

パヴィア周辺には連合国軍捕虜の収容所がいくつもあった。9月8日に捕虜たちは解放されて、ある者たちは南を目指し、前線を越えて連合国軍に合流しようとした。ほかにスイスを目指す者たちもいた。多くの者が、農民たちの家にかくまわれたが、駐留ドイツ軍に地域が占領されるとすぐ、ドイツ軍に逮捕されてしまった。農民たちに匿われていた者たちはみな、いずれにしても、大部分のイタリア人と同様に、戦争は数週間でイタリア北部に連合国軍がやってきて終わるのだから、短期間だけ

隠れていればいいのだと信じていたのだ。ただし、連合国軍の進軍は停滞していた¹³⁾。

どの町にもファシスト側の密偵が回り、ドイツ軍からは捕虜をかくまう者は死刑であるとの布告が出た。その冬は厳しい気候で食糧事情も悪くなり、元捕虜たちの多くは南かスイスカ、どちらかに逃れようとした。そんなとき、オリオとその友人の（戦後ジャーナリストとして活躍する）ウーゴ・ペッテンギ Ugo Pettenghi に、「正義と自由 Giustizia e Libertà」のパルチザンの医学生（のちに医学部の神経精神医学科教授となり、「レジスタンス史・現代史研究所」の創設者のひとりとなる）フランコ・アンドレアーニ Franco Andreani から連絡が入る。元・捕虜である連合国軍兵士をかくまっている農民のところに行って、スイスまで一緒に行くよう兵士を説得し、農家の隠れ場所から連れ出せないか、という依頼だった。

いつ移動を決行するか。それから、（彼らはしばしば軍服しか持っていなかったから）元捕虜たちに着替える私服を届け、ミラノの「マッジョ社」という名前の会社名義になっている、ボッカッチョ通りのアパートに送り届けなければいけなかった。ミラノに午後の遅めの時間に到着し、工場の終業と郊外に戻る人たちで混雑する時間帯を選ぶようにと言われた¹⁴⁾。

元・捕虜たちはその後ミラノに一泊してから、コモに連れて行かれ、おそらく徒歩で、国境を越え、スイスに逃げるようになっていた。

いつもながらの気楽さで、ぼくらは当然のようにそれを引き受ける約束をし、数日後に最初の指示を受け取った。ドルノ Dorno 近くの農場に二人の元・捕虜がいて、彼らはスイスに行く意志があるとのことだった。ぼくらはまず自転車でそこまで行き、その農民に、一だれだったか今は覚えていないが—ある人からの使いだと名前を言うことになっていた。よく覚えているのは、その農民が合点がいけない顔をしたことだ。ぼくらの顔が若すぎて信頼ができなかったにちがいない。しばらく話してから、農民は二人の元・捕虜がいることを伝えて、ぼくらに会わせてくれた。二人はリビアで捕らえられた南アフリカ軍の兵士だった¹⁵⁾。

本当は南に行きたかった二人に、スイスからイギリスに行けるからと、実は不確かなことだったのにもかかわらず、あまり正確ではない英語でオリオは説明して、数日後の朝に迎えにいく約束を交わした。そのときに彼らが着ていたのは農家にあったあまりにも着古された服だったので、ほかの洋服を持ってくるからと言って、目算で寸法に見当

をつけた。それから家に戻って、国外に逃げる元・兵士たちのためだと説明して母親たちに洋服を見つけてもらうのは簡単なことだった。

大変だったのは、パヴィアの町に彼らと入ることだった。当然ながら、ぼくらは自転車に乗って町に着くことになるのだが、市街に入るために越えなければいけない「帝国橋（現在の「自由の橋」）」には、（サロ）共和国側の検問があったのだ。そこでぼくらは、何人かの少年のグループにまぎれて、みんなで自転車に乗って騒ぎながら通ればいいということを考えた。そうすれば、きっと身分証明書を出せとは言われないだろうと思ったのだ……何人かの友人たちに連絡し、一たしか、そのみんなに本当のことを話して一、その決まった日の夕方4時だか、5時だかに、橋から南、2キロほど離れたところで集まる約束をとりつけた。あとのことはすべて簡単だった¹⁶⁾。

決めてあった約束の日を迎えに行くと、農民一家が持たせてくれた食事の包みをもって、元・捕虜たちが待っていた。持っていった洋服に着替えさせ、自転車のサドルの前のポールに彼らをすわらせ出発した。人通りのない道を選び、川辺で時間をつぶしながら、彼らとおしゃべりをし、おそらくすぐに彼らが捨てただろう、住所の交換までした。川で泳いで、ちょうどよい時間になったところで、二組、再び自転車に二人乗りをして、友人たちと約束していた場所に向かう。五、六人が集まっていて、みんなで手筈通り、橋の方に走っていった。元・捕虜といっしょのオリオとウーゴを真ん中にし、歌いながら、まるで、ポー川のエミリア地方側の丘陵地帯に遊びにいった帰って来て、すこしワインでも飲んでいような調子で大さわぎをしながら、走った。近づく前から、こちらを兵士が見つめていたが、通っていいという身振りをして、結局は特に注意する様子もなかった。身分証明書の提示も求められないで済んだ。

鉄道の駅に着くと、友人たちと別れ、自転車から列車に乗り換えなければならなかった。別々の号車にのりこみ、駅でまとめて買った切符をそれぞれが持って、ミラノにむかった。もし、鉄道警察官がまわってきたら、どうするか。しゃべってはいけない。

ぼくは、私服だろうと、制服だろうと、だれかに話しかけられたら、一尋問されてしまったら一、聞こえないふりをするように、と彼らに言った。ぼくは彼らにそう言えるのが誇らしくもあって、何回か繰り返した。“Pretend to be deaf and dumb”¹⁷⁾。

列車では検札がまわってくる車両をうまくさけることもでき、万端計画通りすすみ、少年たちは元・捕虜を無事、約束の「マジョ社」に送り届けることができる。そっけなく自分たちが追い返されたことだけが残念だったが、数日後にミラノに戻って同じ会社

に行くと、汽車の切符代などの立て替え分をくれただけでなく、いくらか、わずかながらの礼金までを手渡された。そこで、二人の少年たちは何を買おうか、品揃えの悪くなっていたミラノの中心街の店のウィンドウを見て回り、金属製の飛行機の模型を買うことにした。それは、精巧によくできたシュトゥーカ、ドルニエ、メッサーシュミットの戦闘機だった。ドイツ軍への抵抗運動で手にした金でドイツ製の製品を買うのが、少年たちには愉快で皮肉なことに思えたから。

この後、1944年の春から夏にかけて、何人かの元・捕虜のニュージーランド人、イギリス人やアメリカ人を送り届けるのにオリオは成功するが、ある時点でもう指示はこなくなつたという。必要がなくなつたものか、危険になりすぎたのかは、不明だった。そして、戦後、1946年の年末、自分たちの子供の年齢にあたる兵士たちを助けた年配の農夫たちにまぎって、オリオとウーゴの若い二人組はイギリス連邦軍の兵士たちを助けた行動によって表彰され、少額ながら礼金までもらった。そのときはその金で、当時パヴィアに駐留していたシーク人の連合軍兵士たちからタバコを買って吸った、という。

レジスタンスに関わった記憶を記したこの本には、イタリア現代史・レジスタンス史に関する実証可能な重要な新事実の記述はおそらくほとんどなく、すでに出版されている関連の本に何か重大な史実を書き加えるものではないだろう。オリオの行った唯一の武力行使として語られるのは、当時ドイツ軍の病院として使われていた（もともと大学寮であった）歴史的建造物に入っていくところだった若いドイツ兵に向けてオリオが投げた手榴弾が爆発し、翌日建物には破損が多少見られたが、何の話題にもならなかった、という事件だけである。そして、後日談として、実際には政治的判断でその爆発は公表されなかったとわかったときの失望や、偶然の重なりで、負傷することのなかった標的のドイツ兵が実は、後年学会でつながりのできたドイツの遺伝学者だったことが判明した、というエピソードが記されている。

ただ、そのように淡々と語られているものの、実際には深刻な危険を冒しながらの抵抗運動への参加や協力が、その一翼を担おうとした少年の視点から語られ、何人かの名の知られるパルチザンや協力者たちもふくめ、信条や社会党・人民党・行動党などの支持政党の違いがあっても、少年たちや親世代の一人一人が、北イタリアの小都市においてどのように連帯したのかが描かれているのが、本書において興味深い点である。そして、それが個人個人の経験あるいは個人間の関係として、戦時中でもレジスタンス下でも続いていた生活の風景の中に描かれているところが特色であり、当時の人のつながりや事件が戦後においてどのような意味をもったかも、今日の読者の関心をひくだろう。

5. 1944年夏の「休暇」とその終わり

1944年夏のはじめ、学校・大学の授業期間が終わると、チフェッリ家は休暇を過ごすためにマッジョーレ湖畔のクレーヴァ・ディ・ルイーノ Cleva di Luino に移る。借りた家

は、この本で何度も登場するスイス出身の学生ファウストがみつけてくれたが、スイス国境からわずか3キロしか離れていない場所にあったのは、夏休みを過ごすためだけでなく、もしもの場合に備えての決断であり、だれにもその住所は知らせないよう父は子供たちに伝えていたという。湖で泳いだり、ファウストの友人たちと船で遊んだり、山歩きをしたりして過ごしたが、それはまた、国境への道を暗がりでも進めるようにする訓練であったらしい。そして実際その地域では、ドイツ軍とレジスタンス側との攻防戦が繰り返されていたし、40日間という短い期間ではあったが、レジスタンスによって「オッソラ独立共和国 Repubblica dell'Ossola」が1944年の9月から10月にかけて樹立された土地でもあった。チフェッリ家のきょうだいも、朝、爆音を聞いて目覚めながら、湖に水泳に出かけるような夏の日々を送ったという。

1944年10月はじめ、新学期のはじまろうという時期に、まだクレバ・ディ・ルイーノに滞在していたオリオは呼び出しをうける。夏までの学期中、強権的な教員の授業に抗議の意図から出席を拒否していた、体育の追試験を受けなければいけないという通知だった。夏の間の滞在先で受験してもよかったので、比較的近いヴァレーゼ Varese に、体育実技の追試を朝から受けに出かけることになったという。試験を終えてルイーノまで戻ると、駅に一家の友人ファウストが待っていて、自分の家にオリオを連れて行くと、その日の朝、家族に起きたことを説明した。パヴィアの家にSSがやってきて、屋根裏にあった無線ラジオを発見、ルイーノの滞在先をつきとめてこちらに向かっていると、父の同郷の友人が知らせてきたのだという。すぐにオリオの母、姉、妹は親戚をたよってサロに向けて出発し、父はまずミラノに行き、そこでオリオと翌日落ち合う手筈だった。

数ヶ月前、父ラッファエーレが所長宿舎でもあった植物学研究所の屋根裏に非合法の無線ラジオを設置し、アメリカ軍の偵察局と結んでいるミラノの抵抗運動の拠点のラジオと通信していた。どのような経緯かは戦後も明らかにならなかったが、ドイツ軍に通報されてしまったのだ。ラジオの操作をラッファエーレとともにに行い、その存在を知っていたのは二人の職員だけだったが、彼ら自身もドイツ軍に逮捕され、ミラノのSSからドイツ国内の強制収容所に送られ、そのうちの一人は戦後も生還することはなかった、という。

6. 戦争の終結と日系部隊

この日から、チフェッリ一家は逃亡生活に入るが、歴史の皮肉か、まずファシストたちがさいごまで守ったイタリア社会共和国の中心、サロに向かい、そこで父方の親戚のもとで過ごす。さらに、より安全であると思われた、連合国軍が近づきつつある中でレジスタンスの武装闘争の激しかったことで知られる母の故郷アルバに1944年11月に移る。そして、そこで戦争の終結を迎えることとなり、ほぼ10ヶ月を過ごす。一家がすで

に有していたスイスとの関係から、スイスに逃亡したとみなされたい。その間驚くべきは、オリオも姉フィオレッタも妹ドナテッタも三人そろって、避難先でも学期中は高校・中学に通わされていた、ということだ。身分証明書を何とか手に入れたが、パヴィアの学校にアルバからの通知もなかったのか、家族の居所が警察やドイツ軍に知られることなく済んだのだという。

ラッファエーレは、妻の実家があり毎夏休暇を過ごしていた当時のアルバの町で名前も顔も知られていないはずがなかった、とオリオは言う。その意味で、その小さな町も、決して安心できる場所ではなかっただろう。それにもかかわらず、だれからも通報されことなく、戦争の終結時までどうしてそこで過ごすことができたのか。

今でも理解しがたいのは、なぜ、だれも我々一家がパヴィアを後にして、アルバに移ってきたのを、不思議に思わなかったのか、である。アルバは小さな町で、とても危険になっていたのにもかかわらず。おそらくは、どうして我々がそこにいるかを理解した、もしくは疑った人は、その疑問を表に出すのを注意深くさけたのだろう。アルバの町の大部分の市民たちは、反ファシストの感情をいだいていて、この町にいる我々の存在がどちらの陣営に属するものかも、はっきりしていたはずだ。そして、我々のことを知っていた人たちは、みなブルジョワであったということだ。祖父母やおじおばたち、両親の友人たち……その人々の間には、おそらくは、社会的階層内のある種の連帯というようなものがあつたにちがいない¹⁸⁾。

レジスタンス側とファシズム勢力との攻防のつづく中、この町で過ごしていたオリオも、最終的に市街が解放され、連合国軍が到着するのを 45 年 4 月 28 日、間近に見ることになる。もうすぐ連合国軍が自分たちの町に到着するという知らせで、人々は屋外でイギリスやアメリカの古い旗をひっぱり出してきて、待っている。

何時間か待っていると、遂にエンジン音が聞こえてきて、大聖堂の広場に大きな白い星をボンネットにつけたジープや、オリーブ・グリーン色のトラックが到着する。これでまちがいはない。戦争は終わったのだ。

車列はそこでとまり、兵士たちが車からおりてくる。すると彼らは「黄色い」じゃないか。アメリカ人ではない、日本人だ。がっかりでもあり、ふしぎでもあり、どうも腑に落ちない。アメリカの車に、アメリカ人の格好をして乗っているのに、どうしてアメリカ人ではないのだろう¹⁹⁾。

その後オリオ自身も知るのだが、解放されたアルバに到着したその部隊は、実は日系二世の兵士たちからなる第 442 部隊だったのである。多くの軍功勲章を得た第二次世界

大戦史上有名なこの部隊がイタリアを解放した連合国軍の一翼を担っていたことが今まで注目されていないのは、驚くべきことだとオリオは指摘する。そして、この時期に同居していた（クラウドリオと兄弟にあたる）いとこのフラヴィオ Flavio が後年、アメリカで結婚した日系二世の女性の弟が、その部隊でイタリア解放に参加していたことを、後年、本人たちから直接聞くことになる。

ともかくも、日系アメリカ人部隊であることを理解できなかったアルバの少年たちは、翌日、アメリカ人のイメージにぴったりの黒人兵たちのトラックの到着で、やっとそのアメリカ人らしさに納得して満足した、という。

なお、アルバのレジスタンスは、この町の出身の作家ベッペ・フェノッリョ Beppe Fenoglio (1922–63) が自らのレジスタンス経験に取材した作品によって、戦後広く知られるようになった。イタロ・カルヴィーノによってネオレアリズム文学の最高傑作と評価された『個人的な問題 Una questione privata』(1963) はじめ、長編『パルティザンのジョニー Il partigiano Johnny』(1968) や『アルバの町の二十三日間 I ventitré giorni della città di Alba』(1952) 等で詳細に語られている。ただし、オリオが『オリオと仲間たち』で指摘する日系部隊の到着については、フェノッリョも語っていない。

いよいよ戦争が終結し、チフェッリ一家はパヴィアに戻る。植物学研究所の建物で、所長の住居でもあったヴィラは、ドイツ軍兵士たちが遊びで撃ったのか、弾痕が家の中に残され、家具も破壊されてすっかり荒れ果てていたが、再び一家は日常の生活と仕事を取り戻していく。オリオはまず、ともに元・捕虜の移動を助けたウーゴが、ダッハウの強制収容所から帰還したところに会いに行く。ウーゴは家族とともにパヴィアを逃れたオリオとは異なり、オリオとパヴィアで行動をとともにしたのち、バルチザンとして武装闘争に本格的に参加して逮捕され、パヴィアの監獄からダッハウに移送され、そこで終戦を迎えていた。社会主義者で起業家であった彼の父親はアウシュヴィッツで亡くなっていた。一方、多くのイタリア人が、「解放」直前の最後の数日間の行動だけでレジスタンスに参加したと主張するのを目にしては、オリオは違和感をいだく。

この本の末尾では、幸いに家族を失うことのなかったチフェッリ家が、生活の困難を抱える親戚たちと再びパヴィアの家で同居しながら、戦後すぐの苦難と生活をのりきっていくことが語られる。そして自分たち家族だけでなく、社会全体が急速に復興し、時代はイタリアの経済奇跡と呼ばれる 50 年代、60 年代へと向かっていく。

ただし、これはまた別の話・歴史 storia である²⁰⁾。

結び、「歴史」に参加する意思——行動と証言

パヴィア大学教授として、マイクロバイオロジー、遺伝学の分野で国際的に活躍していたオリオ・チフェッリと本稿筆者は 1988 年に知り合い、『オリオと仲間たち』が刊行

されるまでの30年間の長きに渡り、この書物で語られる体験を断片的に本人の口から聞いたり、本の中に登場するオリオの友人たち、レジスタンスの仲間たち、親戚家族の名前や、彼らとの思い出や交友関係について耳にしたりする機会がしばしばあった。本書の中でオリオは、自分の父が、1920年のファシストたちのローマ進軍に共感して参加した過去への悔いをおそらくその強い動機として、危険を冒しながらレジスタンスに協力したが、戦後においては、第一次世界大戦での過酷だった従軍体験についても、レジスタンスの経験にしても、自らについて語ることを好まなかった、という²¹⁾。オリオ自身も、自分の政治信条や、自分の家族の1943年から45年の経験を隠すことはなかったものの、自らの過去や思い出として話すことには非常に禁欲的である。

ただし、本書の前書きは、アルベルト・サヴィーニオ Alberto Savinio の短い引用「語れ、人々よ、汝らの物語・歴史 storia を」ではじまる。そして、この本が「未来の覚書」として、1943年から1945年までに起こったことを自分がどのように記憶しているか、それがどのように自分の家族に影響を与えたのかについて、思い起こさせるためのものと述べる。この短い前書きの結びには、それが記された場所と日付として、「オタワ 1987年10月」「パヴィア 1998年4月」「イントラ 2017年8月」と3つが並べられる。この3つの日付は、もともと家族や友人たち、特に3人の息子たちとその子供たちに向けて伝えておきたいと、息子たち家族に配る冊子として、次に個人的に周囲の人々に配る冊子としてまとめたものを、最終的に2017年夏に公刊するために大幅に加筆訂正したという、3段階の本書成立の時期と場所を示している。冒頭の序文は、レジスタンスの経験を共有する同世代のジャーナリスト、ヴィットーリオ・エミリアーニ Vittorio Emiliani が寄せ、本書の内容と、レトリックを排したユーモアのにじむ軽やかな文体からくる読みやすさについて述べてから、オリオのその後の科学者としての歩みや、戦後50年代の学生運動への参加について紹介する。

個人的な「記憶」を語り継ごうとする「意思」と、それが年月をおいてテキストとして出版され読まれることの意味とは何なのか。イタリアのレジスタンスの経験者の文学といえば、アウシュヴィッツの経験を生還後すぐに記録化し、文学作品に昇華したプリモ・レーヴィ Primo Levi や、前述したアルバの攻防に参加しそれを青春小説と言える作品に結晶させたベッペ・フェノッリョがおり、日本の読者にもなじみのあるチェーザレ・パヴェーゼ Cesare Pavese や初期のイタロ・カルヴィーノも、レジスタンスの経験をもとにしたネオレアリズムの作品群から出発している。それらの小説は、戦後イタリアの文学と文化の出発点となったとともに、新しい散文文体を作るものでもあった。オリオはそれらの作家たちと、出身地も世代としても近く、経験も共通する部分があるが、オリオは「文学」ではなく、記憶の継承を目指し、自分のキャリアや人生の節目節目で個人的な覚え書きとしてまとめてから、戦後70年後に、強い意志と希望をもってはじめて公刊した。その時点で彼が目指したのは、もはや家族のためのパンフレットをまとめるこ

とでも、生存している仲間たちやその家族と共有するための自費出版でもなく、広い読者との出会いを可能にする出版社から、レジスタンスの期間に限っての記憶を一人の市民として「公刊」することだった。そしてそこから浮かんでくるのは、かつての少年のまなざしでたどられるレジスタンスの個人的な経験を軸にした、家族や友人たちとの関係、内戦下の日常と非日常の混在である。

歴史的百科事典で知られる出版社トレッカーニ Treccani 社のネット上の雑誌《アトランテ Atlante》に掲載されたカルロ・プルソーニ Carlo Pulsoni による本書の書評²²⁾は、イタリアの国民的歌手であるフランチェスコ・デ・グレゴリー Francesco De Gregori の歌から「歴史とはぼくらのことだ」という一節を引き、英雄的主人公たちによる大きな「物語」としての「歴史」ではない、「歴史」を築く小さなひとりひとりの「記憶」として、本書を紹介するものだ。言い換えれば、「歴史」に参加する意思が、個人としての「記憶」を、小説やフィクションではない「覚え書き」として「物語化」したものが本書であり、それはその物語が社会において共有されることを求める市民意識としても捉えられるだろう。本書を形にしたものは、「歴史」とはわたしたちひとりひとりが個々人として参加して築きあげ、継承し、語られるべきものだ、という信念であり、その個人の「物語」を可能にしたのは、個人のことば＝文体である。オリオの場合においてその文体を支えるのは、イタリアの内戦と「解放」という歴史的な特殊な状況に参加した記憶が、戦後の人生においても生き続けたと同時にそれらを核にしながら積みあげた新たな文化と経験である。ただし、文体そのものの完成を目的としないという意味において、これは「文学作品」ではない。そして 20 世紀イタリアの地域文化と現代史理解のために、一人の市民としての個人の「記憶」がどのような経緯と意思によって記され、テキストが生まれ、刊行されたのかという、いわば「前テキスト」というべき成立の事情と背景もふくめて分析の対象とされるべきだろう。

ここ数年来、新たなポピュリズムの潮流にゆれるイタリアの現状を生きる読者に、かつてのひとりの少年によるレジスタンスの行動と「参加」の「物語」がどのように読まれうるのかは、歴史観と市民的共同体の継承の問題につながっているはずだ。その意味で、この小さな書物は、他の、すでに書かれた、またはこれから書かれるかもしれない小さな書物の「仲間たち」とともに、(ジャーナリストや歴史家や映画作家たちが近年再提起している)「歴史」の生成と継承の場に参加する個の意思であり、一つの声だと言えるだろう。かつての戦争の時代を振り返り検証する必要があるが、世界においてかつてない危機感をもって語られる今、従来日本で十分に知られることのなかったイタリア「解放」の「歴史」の一端として耳を傾ける価値のある、ひとりの少年の、そしてイタリア 20 世紀の遺言の一部なのではないか。

注

- 1) イタリア共和国憲法第 1 条
- 2) Martin Scorsese, « My Voyage to Italy », 1999 (邦題《私のイタリア映画旅行》) は映画として表現された自伝的イタリア映画論・アンソロジーである。その中でスコセッシはイタリアのネオレアリズム映画を戦後のイタリア文化の国際的復権として高くそう評価している。
- 3) Maria Corti, *Il viaggio testuale*, Einaudi, Torino, pp. 25–110.
- 4) Ermanno Olmi, « Toneranno i prati », 2014; Aldo Cazzullo, *La guerra dei nostri nonni*, Milano, Rizzoli, 2014; Aldo Cazzullo, *Possa il mio sangue servire*, Milano, Rizzoli, 2015.
- 5) 当時、中南米各国で、大規模なプランテーション農場経営を目指すのための専門的知識と技術を教える学校が、北米の農学校をモデルに開校された。その運営教育にあたる若手農学者が各国から集められ、イタリアからは戦後有名な作家となるイタロ・カルヴィーノ Italo Calvino の両親がキューバに渡って農学校での教育にあたり、イタロはその時期にキューバで生まれている。ラファエーレ・チフェッリは、カルヴィーノの父マリオ Mario のイタリアでの募集にこたえる形でドミニカ共和国に赴任したという。
- 6) 森田鉄郎編、『イタリア史』、山川出版社、1982, pp. 489–490.
- 7) Orio Ciferri, *Orio e gli altri. Di giovinezza e di guerra*, Verbania, Tarara' Edizioni, 2018, p. 15.
- 8) Idem, pp. 15–16.
- 9) Idem, pp. 16–17.
- 10) Cfr. シモーナ・コラリーツィ著、村上信一郎監訳、橋下勝雄訳、『イタリア 20 世紀——熱狂と恐怖と希望の 100 年』、pp. 223–224.
- 11) Orio Ciferri, *op. cit.*, p. 22.
- 12) Idem, p. 33.
- 13) Idem, p. 38.
- 14) Idem, p. 39.
- 15) Idem, p. 39.
- 16) Idem, pp. 40–41.
- 17) Idem, p. 43.
- 18) Idem, p. 84.
- 19) Idem, p. 94.
- 20) Idem, p. 100.
- 21) Idem., p. 63.
- 22) Carlo Pulsoni, *Incroci di storia*, http://www.treccani.it/magazine/atlante/cultura/Incroci_di_storia.html